

# 氾濫形態に応じた神社の立地特性と役割

清水 梢<sup>1</sup>・二井 昭佳<sup>2</sup>

<sup>1</sup>非会員 東日本総合計画株式会社 まちづくり本部 都市再生部  
(〒350-1124 埼玉県川越市新宿町5-3-3, E-mail : shimizuk@tolex.co.jp)

<sup>2</sup>正会員 国土館大学 理工学部 理工学科 まちづくり学系 教授  
(〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1, E-mail : nii@kokushikan.ac.jp)

本研究では、荒川流域の熊谷市を対象とし、神社の立地地形、集落や過去の氾濫流路との位置関係、祭神や社殿などの観点から神社と洪水の関係性を分析した。その結果、扇状地では集落に氾濫流の直撃を防ぐよう、洪水の流下方向でかつ集落の端か集落から独立した場所、氾濫平野では氾濫水の水量や水勢を抑えるために、堤防の近くに立地している傾向を明らかにした。この立地特性の違いは氾濫形態の違いにより生じており、土地の特性を把握した上で、神社が洪水被害を抑えるために設けられた可能性を指摘した。また、立地する場所によって祭神や社殿の基礎の高さが変化することから、神社にはそれぞれの土地条件や歴史が反映されており、意味をもって設けられたことを確認した。

**キーワード:** 神社, 洪水, 氾濫, 扇状地, 氾濫平野, 祭神

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的

古くから日本各地に存在する神社は、人々の精神的な拠り所であるとともに、祭りなどを通じた地域コミュニティ創出の場でもあった。現在、神社の多くが集会所等を併設していることから、今なお地域コミュニティのシンボルとして位置づけられているのがわかる。また、風景的な視点から神社に注目すると、神社を囲い守るように形成された「鎮守の森」が特徴に挙げられる。この森は神々が住まう場所、降臨する場所とされており<sup>1)</sup>、神道の基盤である自然崇拜を象徴するものであるとともに、貴重な自然景観のひとつでもある。ここで注目したいのは、神聖な森としてみだりに手を加えられず、古くからその土地本来の樹種で構成された鎮守の森に防災林的な機能があると注目されてきていることである<sup>2)</sup>。神社と自然災害との関係については他にも、東日本大震災の際、多くの神社が津波被害を免れており、それらの神社は津波到達ライン上に沿って立地していたという報告<sup>3)</sup>がある。

このようなことから神社と自然災害の間には、何らかの関係がある可能性が高い。その関係性を明らかにすることは、かつての人々の自然災害との向き合い方を知ることであり、それは今後のまちづくりにおいても重要な役割を持つといえる。

しかし現状では、神社と自然災害の関係性に着目した研究は少ない。こうした状況のなかでも、神社と津波に

着目した宮坂ら<sup>4)</sup>と高田ら<sup>5)</sup>の研究がある。宮坂らは、仙南平野の神社の多くが微高地上に立地していること、水害を治める伝承が残る神社は津波被害を逃れていることを明らかにしている。また高田らは、治水と関係のあるササノオを祀る神社が津波被害を免れていることを明らかにし、神社が地域のリスクマネジメントにおいて重要な役割を果たしうる空間であると指摘している。これらの研究においては、人々は自然災害を回避しうる場所を選定した上で神社を置き、水害を治める神を祀ったり、伝承を残しているとわかる。一方で、神社と地震に着目した是澤らの研究<sup>6)</sup>では、活断層のある地域の神社が、地震の起きやすい活断層上に分布していることを明らかにしている。

以上のことから、神社は大まかにリスクの低い場所に立地するものと、リスクの高い場所に立地する二種があると考えられる。

これを踏まえ、本研究では近年の集中豪雨の増加などにより発生リスクが高まっている洪水に着目する。神社と洪水に関する研究に、服部・二井の研究<sup>7)</sup>がある。洪水常襲地である扇状地の散村集落を対象にしたこの研究で、神社が川と集落の間に存在し、氾濫流路になる谷筋に位置していることから、神社が洪水を拡散させ、集落を守る役割を担ってきた可能性を指摘した。微地形レベルの分析で明らかになったこの成果は、神社は人々が地形を読み取り、意味を持たせ作り上げたものであるという説を強くした。ただ、各々の神社の祭神や洪水常襲地ならではの神社に見られる特徴があるかどうかや、他

の地形との比較までは踏み込んでいない。

そこで本研究では、洪水常襲地である扇状地と氾濫平野を対象に、合祀などにより消失したのものも含めた神社を特定し、それらの立地地形や洪水被害、集落や河川との位置関係の分析を踏まえ、その立地条件ごとに神社に見られる祭神や構造などの特徴を整理する。以上より、神社と洪水との関係性を明らかにし、自然災害の観点から神社に持たされた意味について考察することを目的とする。

## (2) 研究の対象と方法

研究の対象地は、埼玉県熊谷市の中で過去に洪水被害を受けている、またはハザードマップ<sup>9)</sup>で洪水の危険性が高い33の地区とする(図-1)。これらの地区は荒川の扇状地と氾濫平野にあたり、荒川の名が示すように過去幾度となく洪水に見舞われている。ゆえにその扇状地上には、氾濫の度ごとに形成された放射状に広がる旧河道や微高地が多くみられる。

研究の方法は、まず2章で対象の地区にある神社の特定を行う。ここでは、明治の合祀政策で消失した神社も対象とし、合祀前に作成された迅速測図<sup>10)</sup>を用いてその位置を特定する。3章では、治水地形分類図(国土地理院)を用いてそれらの神社の立地地形を把握する。さらに、過去の洪水図などを参考に氾濫流と神社の位置の分析なども合わせて行い、神社の立地特性を明らかにする。また、4章では明治時代の神社明細帳<sup>11)</sup>などを用い、祭神と洪水との関係、現地調査による神社の構造など、洪水常襲地の神社にみられる特徴の調査を行う。以上の結果を踏まえ、5章では神社と洪水との関係性を明らかにし、水防災の観点からみた神社の存在意義について考察する。

## 2. 対象神社の特定

対象の地区に現存する神社に加え、合祀等で消失したのものも含めて特定するため、合祀以前の明治16、17年に作成された迅速測図を用いて神社を探した。そして、それらの神社を現在の地図と比較し、神社の消失や遷座などの有無を確認した。また、消失している神社で名前が不明なものは神社明細帳を用いて明らかにした(図-2)。その結果、明細帳に記載されている116社のうち、66社を特定することができた(表-1)。

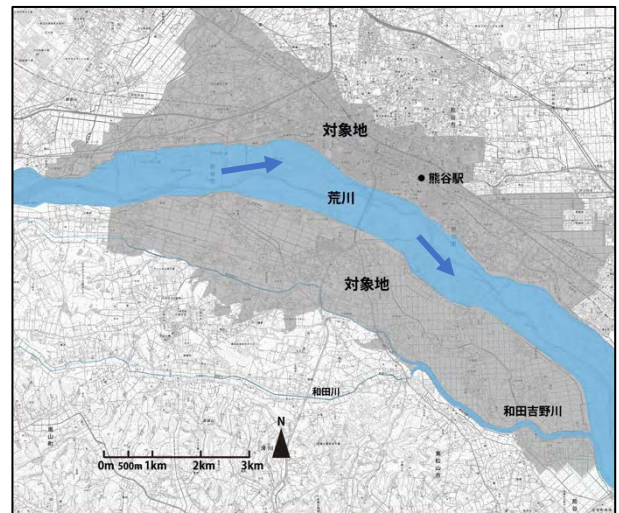


図-1 研究対象地(埼玉県熊谷市)

### 対象神社の特定方法の例

①迅速測図に記載の神社を探す



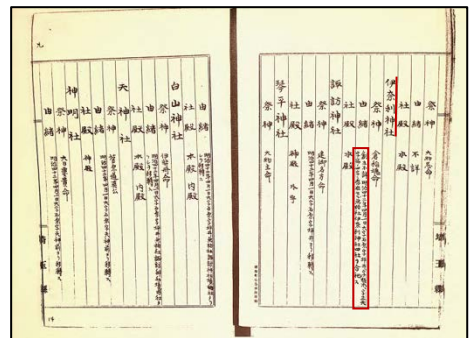
→「赤城社」と2つの無記名の神社が見つかった

②迅速測図と現在の地図を比較し、神社の消失や遷座の確認をする



→「赤城社」は「赤城久伊豆神社」という名で現存するが残り2つは消失

③神社明細帳を用いて消失している神社の名前を特定する



→ 神社の小字(植木, 正夫)から赤城久伊豆神社に合祀された「伊奈利神社」と判明

(赤枠内)「創立不詳 明治四十二年四月一日大字石原字坪井, 字植木, 字正夫, 字宿ノ四字に存在セル無各社伊奈利神社四社を合祀ス」

図-2 対象神社の特定方法

表-1 対象神社一覧

村町名	No.	神社名	住所	
熊谷	1	高城神社	宮町2-93	
	2	千形神社	本町1-18	
	3	奴伊奈利神社	仲町43	
	4	愛宕神社 * 1	鎌倉町3	
	5	宇佐稲荷神社 * 1	鎌倉町42	
	6	稲荷木伊奈利神社	銀座3-46	
	石原	7	赤城久伊豆神社	石原1007
		8	伊奈利神社 *	石原650-14付近
		9	伊奈利神社 *	石原207-4付近
	廣瀬	10	浅間神社	広瀬115
		11	日吉山王宮 *	広瀬578付近
小島	12	春日神社	小島112	
久保島	13	久保島大神社	久保島471	
	14	神明社 *	久保島2178-5付近	
大麻生	15	大榮神社	大麻生454	
	16	八荒神社 *	大麻生1990-6付近	
	17	赤城神社	大麻生1098	
武体	18	田中神社	三ヶ尻2924	
河原明戸	19	諏訪神社	川原明戸177	
佐谷田	20	佐谷田神社	佐谷田310	
	21	大雷神社	佐谷田3983-2付近	
	22	神明社 *	佐谷田3741-3付近	
久下	23	伊奈利神社 (現・久下神社)	久下829	
	24	三島神社 *	久下堤外地	
	25	八幡神社 *	久下1243-1付近	
	26	神明社or伊奈利 *	久下1726-4付近	
	27	神明社or伊奈利 *	久下1892-7付近	
太井	28	榛名神社	太井2284	
	29	神明社 *	太井1827付近	
新川	30	三島神社 *	新川堤外地	
	31	八幡神社 *	新川堤外地	
押切	32	八幡若宮八幡神社	押切1056-1	
三本	33	渡唐神社	三本717	
樋春	34	七社神社	樋春1023-1	
成澤	35	赤城神社	成沢346-2	
御正新田	36	雷電神社	御正新田438	
万吉	37	氷川神社 *	万吉3478付近	
	38	八幡神社 (現・氷川神社)	万吉986	
	39	不明 *	万吉878-2付近	
	40	八坂神社 *	万吉2423付近	
	41	伊奈利神社 *	万吉347付近	
村岡	42	豊由宇気神社	村岡851-1	
上恩田	43	諏訪神社 *	上恩田416-3付近	
中恩田	44	神明社 *	中恩田462-3付近	
下恩田	45	諏訪神社	下恩田576	
手島	46	阿夫利神社 *	手島堤外地	
	47	氷川八幡神社 *	手島堤外地	
小泉	48	愛宕神社 *	小泉723付近	
	49	八尾神社 *	小泉120-2付近	
屈戸	50	氷川神社 *	屈戸81付近	
中曽根	51	五社神社 (現・南市田神社)	中曽根145	
	52	伊奈利神社 *	中曽根160-7付近	
沼黒	53	滝祭神社 *	沼黒1071付近	
吉所敷	54	滝祭神社 *	吉所敷109-1付近	
高本	55	高城神社 * 2	高本373-1付近	
	56	滝祭神社 *	高本56-3付近	
津田新田	57	八幡神社 *	津田新田232-1付近	
	58	琴平神社	津田新田1066-1付近	
津田	59	八幡神社 *	津田897から南東350m	
	60	諏訪神社 (現・八幡神社)	津田897	
	61	火伏稲荷大明神	津田185付近	
向谷	62	諏訪八幡神社 *	津田1-1付近	
相上	63	吉見神社	相上1640付近	
	64	鹿島神社 *	相上1759付近	
玉作	65	八幡神社	玉作343	
	66	不明 *	玉作3419付近	

\* 神社社記により現在は消失

\*1 昭和20年の空襲により消失し、現在は移転

\*2 昭和45年の河川改修により、現在は移転

### 3. 神社の立地

#### (1) 立地地形

荒川というその名が表すように何度も氾濫を繰り返す川を中心とした対象地には、扇状地と氾濫平野の中に小島のようにできたいくつもの微高地や、放射状に広がる旧河道跡等の微低地がみられる。こうした地形条件下で、人々の住まう集落は「選定されていた」ことがわかっている。熊谷市史<sup>12)</sup>には、集落は「周辺の水田との比高が数10cm高い微高地」に立地しているとの記述がある。また、荒川扇状地を対象にした齋藤らの研究<sup>13)</sup>においても、集落の遺跡の多くが自然堤防(微高地)上に存在していることを明らかにしている。つまり、対象地では集落を形成するにあたって、人々は洪水の脅威から生活を守るために、わずかな地形を読み取っていたといえる。したがって、過去の人々が祈りを込め、神を祀ろうとしたその場所の地形には、何らかの傾向があると考えた。

そこでまず、治水地形分類図を用いて、荒川左岸と右岸の上流側から荒川大橋付近までの扇状地面が大部分を占める地域を「扇状地エリア」、右岸の扇状地から氾濫平野に切り替わる荒川大橋から下流側の地域を「氾濫平野エリア」と区別した(図-3)。その上で、両エリアごとに神社の微地形の特定を行った(表-2)。その判定には国土地理院の治水地形分類図を用いた。本研究では、治水地形分類図における微高地と段丘面をまとめて「微高地」とし、扇状地、旧河道、氾濫平野をまとめて「微低地」、さらに堤外地の3つに分類した。

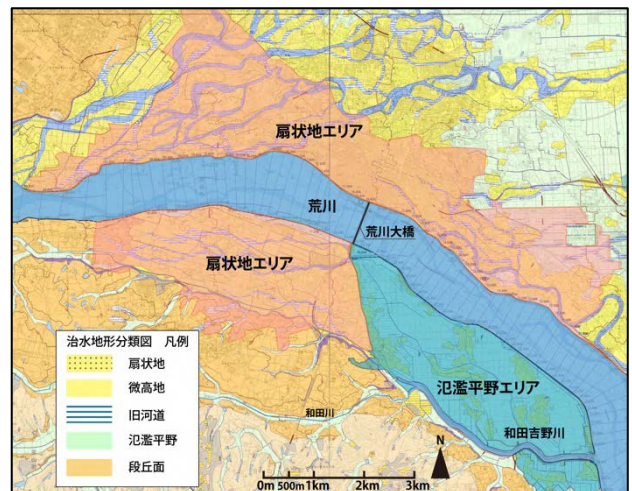


図-3 扇状地エリアと氾濫平野エリア

表-2 神社の立地地形一覧

村町名	No.	神社名	立地地形	
左岸	熊谷	1	高城神社	微高地
		2	千形神社	微高地
		3	奴伊奈利神社	微高地
		4	愛宕神社*1	微高地
		5	宇佐稲荷神社*1	微高地
		6	稲荷木伊奈利神社	微高地
	石原	7	赤城久伊豆神社	微高地
		8	伊奈利神社*	微高地
		9	伊奈利神社*	微低地
	廣瀬	10	浅間神社	微低地
		11	日吉山王宮*	微高地
	小島	12	春日神社	微低地
	久保島	13	久保島大神社	微高地
		14	神明社*	微低地
	大麻生	15	大榮神社	微高地
		16	八荒神社*	微低地
		17	赤城神社	微高地
	武休	18	田中神社	微低地
	河原明戸	19	諏訪神社	微低地
	佐谷田	20	八幡神社(現・佐谷田神社)	微高地
		21	大雷神社	微高地
		22	神明社*	微低地
	久下	23	伊奈利神社(現・久下神社)	微高地
		24	三島神社*	堤外地
		25	八幡神社*	微低地
		26	神明社or伊奈利*	微低地
27		神明社or伊奈利*	微高地	
太井	28	榛名神社	微高地	
	29	神明社*	微高地	
新川	30	三島神社*	堤外地	
	31	八幡神社*	堤外地	
押切	32	八幡若宮八幡神社	微高地	
三本	33	渡唐神社	微低地	
樋春	34	七社神社	微高地	
成澤	35	赤城神社	微高地	
御正新田	36	雷電神社	微低地	
万吉	37	氷川神社*	微低地	
	38	八幡神社(現・氷川神社)	微高地	
	39	不明*	微高地	
	40	八坂神社*	微高地	
	41	伊奈利神社*	微低地	
村岡	42	豊由宇気神社	微低地	
上恩田	43	諏訪神社*	微低地	
中恩田	44	神明社*	微低地	
下恩田	45	諏訪神社	微低地	
手島	46	阿夫利神社*	堤外地	
	47	氷川八幡神社*	堤外地	
小泉	48	愛宕神社*	微低地	
	49	八尾神社*	微低地	
屈戸	50	氷川神社*	微低地	
	51	五社神社(現・南市田神社)	微高地	
中曾根	52	伊奈利神社*	微低地	
沼黒	53	滝祭神社*	微高地	
吉所敷	54	滝祭神社*	微低地	
高本	55	高城神社*2	堤外地	
	56	滝祭神社*	堤外地	
津田新田	57	八幡神社*	微低地	
	58	琴平神社	微低地	
	59	八幡神社*	微低地	
津田	60	諏訪神社(現・八幡神社)	微高地	
	61	火伏稲荷大明神	微低地	
	62	諏訪八幡神社*	微低地	
	63	吉見神社	微高地	
相上	64	鹿島神社*	微低地	
	65	八幡神社	微低地	
玉作	65	八幡神社	微低地	
	66	不明*	微低地	

\* 神社合祀により現在は消失

\*1 昭和20年の空襲により消失し、現在は移転

\*2 昭和45年の河川改修により、現在は移転

表-2 の各神社の立地地形を扇状地と氾濫平野のエリアごとに整理すると表-3 のようになる。

結果として第一に特徴的なのは、扇状地エリアと氾濫平野エリアの立地地形の傾向が対照的なことである。扇状地エリアでは微高地に立地している神社が最も多いが、3割以上は微低地にも立地している。一方、氾濫平野エリアでは微低地に立地している神社が最も多い。これらの対照的な結果は、扇状地エリアと氾濫平野エリアにおける神社の立地選定の基準が異なるものであった可能性を示している。

また、合祀前後での立地地形の割合の変化に着目すると、微低地の神社は半数以上、堤外地の神社は全て消失していた。このことに関して例えば、No.23 の久下神社(旧・三島神社)では、「当社は水害を避けるために堤内にある現在の社地(明治43年に合祀した伊奈利神社の境内であった)に移転し、今に至っている」という記述もある<sup>14)</sup>。このようなことから、合祀の際には神社の洪水被害を考慮した立地を選んでいったといえる。

表-3 立地地形ごとの神社数の割合と合祀による減少率

立地地形 エリア	微高地	微低地	堤外地
扇状地エリア	24/41社 59%	14/41社 34%	3/41社 7%
扇状地エリア (現存)	18/24社 75%	6/24社 25%	0/24社 0%
扇状地エリア (消失)	6/17社 35%	8/17社 47%	3/17社 18%
減少率	25%	57%	100%
氾濫平野エリア	5/25社 20%	16/25社 64%	4/25社 16%
氾濫平野エリア (現存)	3/9社 33%	6/9社 67%	0/9社 0%
氾濫平野エリア (消失)	1/16社 6%	11/16社 69%	4/16社 25%
減少率	20%	69%	100%

## (2) 氾濫時の神社と集落の位置関係

氾濫時、神社が集落からみてどのような位置にあったのかを、前項で特定した神社ごとの立地地形も合わせて分析を行った。まず、過去の4つの洪水図(図-4)に、迅速測図で特定した集落範囲と神社のプロット図を重ね合わせた図-5 から、立地地形ごとに神社と集落の位置関係を集落内、集落の端、さらに集落から独立しているものに分類した。その結果は表-4 に表す通りである。

まず、扇状地エリアをみると、微高地にある神社は差はそれほどないものの集落の端が最も多く、微低地の神社では、集落から独立しているものがほとんどであった。次に氾濫平野エリアをみると、微低地や堤外地の神社は独立しているものが最も多い結果となった。

これを河川との位置関係でみると、扇状地エリアでは図-5で赤丸で囲んだ神社のように、氾濫時に水が来る方向かつ集落の前方に多く存在することがわかる。

一方、氾濫平野エリアにおいては青丸で囲んだ神社のように、堤防沿いにある神社が多い。これに関しては、No. 46 阿夫利神社(石尊祠) (図-6)に「通称石宮という石尊祠があるが此の場所が度々決壊している」という記録<sup>15)</sup>や、No. 63 吉見神社 (図-7)には、天保6年の嵐によって、荒川や神社のすぐ背後を流れる和田吉野川の堤防が決壊寸前となった際、村人がここに祈願したところ被害を免れたという記録がある(境内案内版より)。こういった記録から、神社を決壊しやすい場所にあえて置いていたと推測ができる。

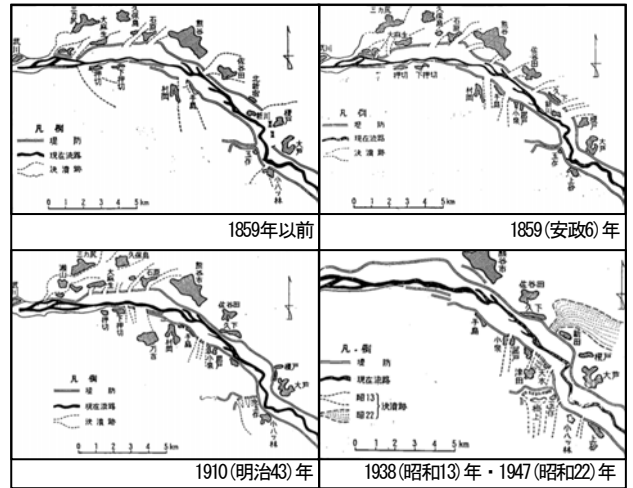


図-4 洪水図(「荒川中流の洪水について」<sup>16)</sup>より引用)

表-4 集落との位置関係

立地地形	扇状地エリア			氾濫平野エリア		
	集落内	集落の端	独立	集落内	集落の端	独立
微高地	8/24社	9/24社	7/24社	1/4社	2/4社	1/4社
	33%	38%	29%	25%	50%	25%
微低地	1/14社	1/14社	12/14社	2/17社	5/17社	10/17社
	7%	7%	86%	12%	29%	59%
堤外地	0/3社	2/3社	1/3社	0/4社	0/4社	4/4社
	0%	67%	33%	0%	0%	100%



図-6 No. 46 阿夫利神社(石尊祠) 図-7 No. 63 吉見神社

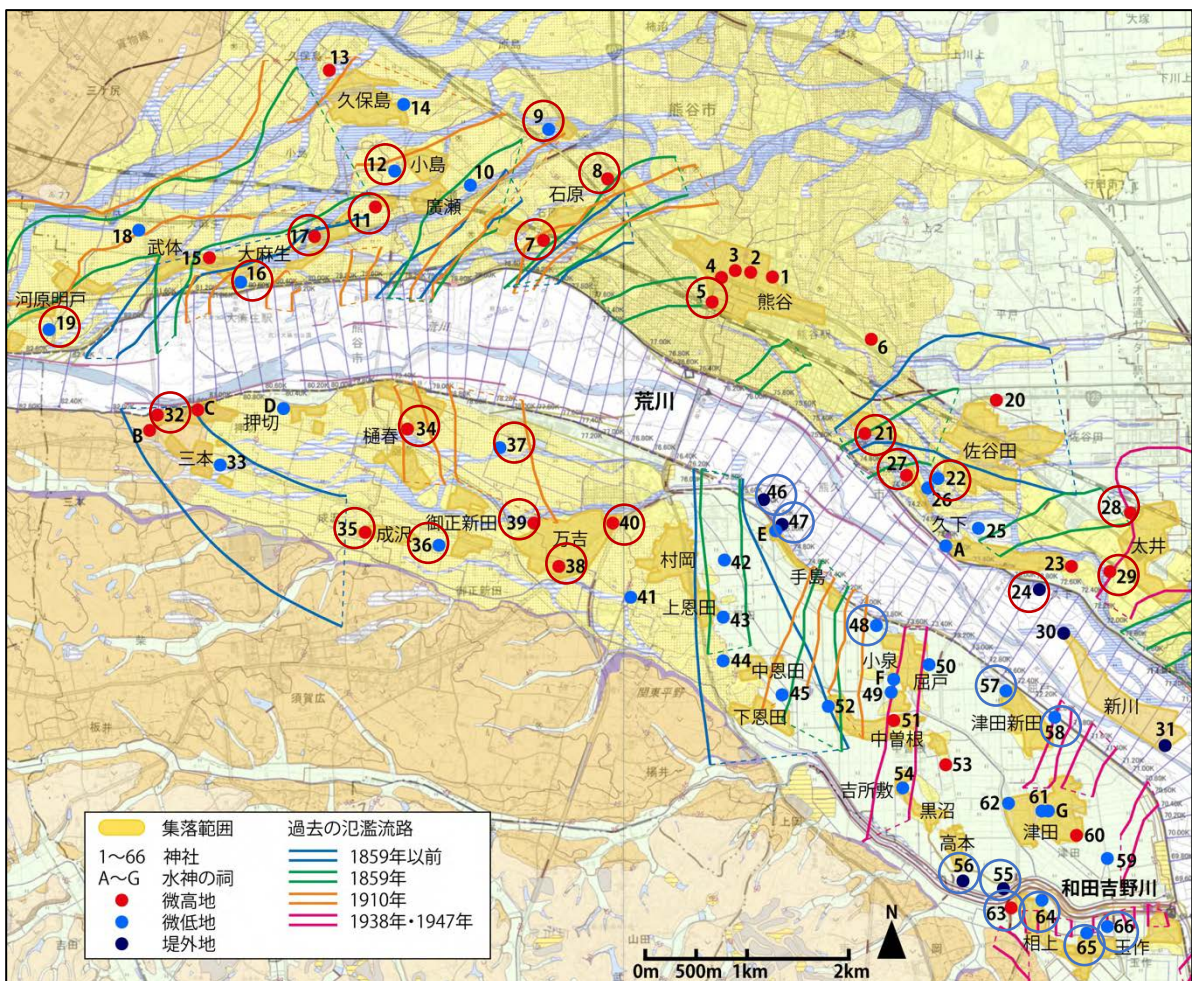


図-5 氾濫流路と集落との位置関係

### (3) 氾濫形態と神社立地の関係性

前項で述べてきたように、扇状地エリアと氾濫平野エリアでは、その神社立地の特徴は大きく異なる結果となった(表-5)。

表-5 扇状地エリアと氾濫平野エリアの神社立地の特徴

立地地形	扇状地エリア		氾濫平野エリア
	微高地	微低地	微低地上
集落との位置関係	集落の端	集落から独立	集落から独立
河川との位置関係	氾濫時、水が来る方向		堤防沿い

これらの違いをもたらす大きな要因として、扇状地と氾濫平野の氾濫形態の違いが考えられる(図-8)。

まず、扇状地では、河川が氾濫すると旧河道などの微低地を氾濫流路として、かなりの速度で水が流れる。そのため、氾濫流やそれに伴う流木や土砂を防ぐために微高地である集落の端か、氾濫流路を塞ぐように集落前方の微低地に独立して設けられ、氾濫水を分散・軽減させていたのだと考えられる。

一方、治水地形分類図をみたとき、扇状地エリアには氾濫流路となる旧河道が放射状にいくつもあるのに対し、氾濫平野エリアでは旧河道は全くみられない。つまり、氾濫平野では、一度堤防が決壊し氾濫が起きると平野であるがゆえに一面に水が広がるのである。さらに、排水が悪いので、その湛水時間が長いという特徴がある。それは現に18日間も退水しなかった記録<sup>17)</sup>があるほどであった。これをふまえ、決壊の記録が残る堤防沿いに多く神社があるということは、そこで神社が洪水被害を軽減させる役割を担っていた可能性あるのではないだろうか。何故ならば、神社の持つ鎮守の森が水害防備林のような働きをしていたと推測できるからである。すなわち、水害防備林の持つ、水勢を弱める、流木や土砂などの洪水流送物の抑制、破堤の防止や拡大抑制等の機能<sup>18)</sup>を活かし、堤内には比較的落ち着いた水が流れ込むようにし、被害を最小限に抑えようとしていたと考えられる。

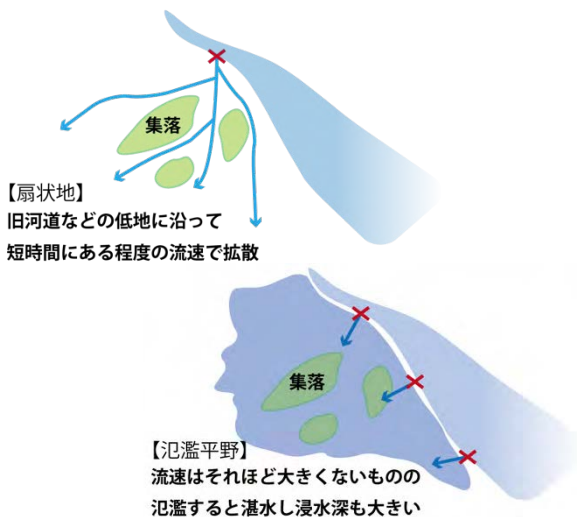


図-8 扇状地と氾濫平野の氾濫形態のイメージ

### 4. 神社にみられる洪水への意識

#### (1) 祭神による神社への意味づけ

神社評論家の東條英利によれば、寺は信仰の拡大のために広がっていったのに対し、教え自体のない神社は「その土地に住む人々が必要だからと、祀られることが基本」のものであり、その土地の歴史が色濃く映し出されていると述べている。その上で、祭神をみることは、その土地に過去どのようなことがあったのかを推し量ることができるという<sup>19)</sup>。確かに、1章でも紹介したが、治水と関係するスサノオを祀る神社は津波被害を免れていたという研究結果もある。

そこで本項では、なぜそこに神社が置かれたかという問いに対して、それぞれの神社の祭神に着目して、さらに神社に込められた意味を探っていく。

まず、神社と洪水との関係性をみるために、川や水に関する神を祀る神社の特定を行った。特定には、神社明細帳による調査を基本に、現地調査も合わせて行った。また、現地調査等で見つかった水神の祠も結果に加えることとした。それらの結果を立地地形、河川や集落との位置関係で整理したのが表-6である。

まず、扇状地エリアでは、川や水に関する神を祀っている神社は約3割であったが、氾濫平野では倍の6割であった。神社に加えて、水神の祠は扇状地エリアでは4宇、氾濫平野エリアでは3宇見つかった。

表-6 水神を祀る神社

エリア (水神を祀る神社の割合)	村町名	No.	神社名	位置関係	祭神(川や水に関する神)	
扇状地エリア 12/41社(29%) +祠4	熊谷	4	愛宕神社*1	集落内	スサノオ	
	久保島	14	神明社*	1	スサノオ	
	佐谷田	22	神明社*	2	スサノオ	
	久下	24	三島神社*	2	スサノオ	
		A	祠	1	九頭龍権現	
	大井	28	権名神社	2	スサノオ	
	新川	30	三島神社*	1	スサノオ、イチキシマヒメ、水神社	
		31	八幡神社*	1	スサノオ、水神宮、九頭龍権現	
	神切	B	石碑	2	弁才天	
		C	祠	集落内	水神	
		D	祠	2	九頭龍権現	
			33	渡唐神社	2	スサノオ、イチキシマヒメ
	成澤	35	赤城神社	1	スサノオ	
	御正新田	36	雷電神社	2	スサノオ	
	万吉	37	水川神社*	2	スサノオ	
		40	八坂神社*	集落内	スサノオ	
	氾濫平野エリア 15/25社(60%) +祠3	村岡	42	豊由宇気神社	3	スサノオ
		下恩田	45	諏訪神社	3	スサノオ、弁才天
		手島	46	阿夫利神社*	4	スサノオ
47			水川八幡神社*	4	九頭龍	
E		石碑	集落内	水神		
小泉		48	愛宕神社*	4	イチキシマヒメ	
		49	八尾神社*	集落内	八尾の犬蛇=スサノオと関連	
F		祠	集落内	弁才天		
厨戸		50	水川神社*	3	スサノオ	
中曾根		51	五社神社(明・南市田神社)	集落内	スサノオ	
沼黒		53	滝祭神社*	3	瀬織津姫、スサノオ	
吉所敷		54	滝祭神社*	集落の端	瀬織津姫、スサノオ	
高本		55	高城神社*2	4	スサノオ、弁才天	
		56	滝祭神社*	4	瀬織津姫、スサノオ	
津田		61	火伏稲荷大明神	集落内	弁才天	
G	石碑	集落内	弁才天			
相上	63	吉見神社	4	スサノオ、水女神、弁才天		
玉作	65	八幡神社	4	スサノオ		

\* 神社合祀により現在は消失  
\*1 昭和20年の空襲により消失し、現在は移転  
\*2 昭和45年の河川改修により、現在は移転

扇状地 1: 集落の端  
2: 独立かつ集落の前かつ水が来る方向  
氾濫平野 3: 微低地に独立  
4: 堤防の近(或)堤外地

これらを位置関係と合わせてみると、扇状地エリアの水神を祀る神社のほとんどが、3章(3)で述べた、集落集落の洪水被害を防止・軽減する位置にあることがわかる。氾濫平野エリアでは、立地地形で最も多かった微低地に独立した神社と、堤内に流れ込む氾濫水を抑制するために堤防の近くに祀られた神社も水神を祀っていることが明らかとなった。

さらに、それぞれの祭神を詳しくみると、最も多いのはスサノオである。スサノオには八岐大蛇(ヤマタノオロチ)退治の逸話があるが、この八岐大蛇は斐伊川の氾濫を表すとされることから、スサノオは洪水などの水害を克服した神であるとされる<sup>20)</sup>。これに関連して、No. 49 八尾神社には、「昔八ツ尾ノ大蛇ヲ祀シ社ト云」という記録がある<sup>21)</sup>。この「八ツ尾ノ大蛇」というのは、八岐大蛇のことを指すと考えられる。これを神として祀っているということは、崇り神を手篤く祀れば、その強い霊威はかえって守護の神になるという御霊信仰の形態を成しているのだとわかる。

次に多い弁才天は、元は河や水を司る水神サウズヴァーティーであり、神仏習合で水神である市杵嶋姫と同一視されている<sup>22)</sup>。確かに弁才天は池や島などの水辺に多く祀られており、弁天池という池なども多く存在する。

また九頭龍権現は、その名の通り9つの頭を持つ龍神であり、雨を降らせたり、逆に大雨を止めるなどの雨を支配する力があるとされる。それらの立地は一つを除いてすべて堤外地であった。先述の八岐大蛇と同様に、龍もその姿から蛇行する河川を表すことがある。

瀬織津姫は、川の穢れを浄化する神とされている。

また、No. 63 吉見神社の水分解神(ミクマリノカミ)という神を祀っていた。この神は、水源地や分水嶺で川の水量を管理・調整する神で、稲作地帯では非常に重要な神であったそうである。

その他の水神は、主に「水神宮」と書かれた祠や石碑など明確な水神が不明なものである。

以上のように、洪水の被害を抑えたい場所や洪水の危険性の高い場所にある神社には、河川や水に関する神が祀られていることが明らかとなった。さらに、神の背景や神徳は、それぞれの土地に密接した関係性を持つことも明らかとなった。つまり、祭神にはその土地の性質や歴史、そして何よりも、そこに暮らしてきた人々の祈りが強く反映されていた。

## (2) 神社の浸水対策

これまでの調査からわかる通り、対象地の神社は常に洪水の危険にさらされてきた神社である。しかし、文献上では流出などの被害記録が残っている神社は少ない。その理由に関係するものとして、ここでは神社の社殿や

境内構成に着目し、現地調査を行った。

現地調査ではまず、神社の氾濫時の浸水対策と考えられるものとして、社殿の基礎部分の高さの計測を行った(図-9)。また、拝殿と本殿の高さが異なる場合は、川側にあたる方を計測した(図-9 右)。そして、計測した結果を高さに分類し(図-10)、立地地形とハザードマップによる浸水時想定水深ごとに整理したのが表-7である。



図-9 計測部分



図-10 社殿の基礎の高さの例

表7 立地条件と社殿の基礎の高さの関係

社殿の基礎の高さ		～29cm	30～49cm	50～69cm	70～89cm	90～119cm	120cm以上	平均高さ
立地地形	微高地	3/20社 15%	7/20社 35%	5/20社 25%	2/20社 10%	3/20社 15%	0/20社 0%	50.9cm
	微低地	1/13社 8%	0/13社 0%	4/13社 31%	3/13社 23%	1/13社 8%	4/13社 31%	88.4cm
浸水時想定水深	浸水区域外 ～1.0m未満	2/10社 20%	4/10社 40%	2/10社 20%	2/10社 20%	0/10社 0%	0/10社 0%	43.7cm
	1.0m～2.0m未満	2/9社 22%	3/9社 33%	2/9社 22%	2/9社 22%	0/9社 0%	0/9社 0%	43.3cm
	2.0m～5.0m未満	0/14社 0%	0/14社 0%	5/14社 36%	1/14社 7%	4/14社 29%	4/14社 29%	95.6cm

まず、立地地形と社殿の基礎の高さの関係をみると、微高地の神社の平均高さは50.9cm、氾濫平野では88.4cmであった。つまり、微低地の神社は微高地の神社と比べ、約40cmも社殿が高くなっている。

ハザードマップとの関係をみると、浸水時想定水深が2.0m未満までの区域では、社殿の基礎の高さが90cm以上の神社は無く、平均高さは40cmほどである。対して、浸水時想定水深が2.0m以上の区域では、高さ50cm未満の神社が無く、平均高さは倍の約100cmとなっている。

以上のことから、社殿の基礎の高さは、神社の立地する場所で想定される氾濫時の被害の大きさに対応しているといえる。

また、現地調査の中で、図-11のように境内に堀がある神社がいくつか見つかった。これは、神域の境界を明確にするものであるとともに、水神を祀っていることを強調するようにも感じられる。

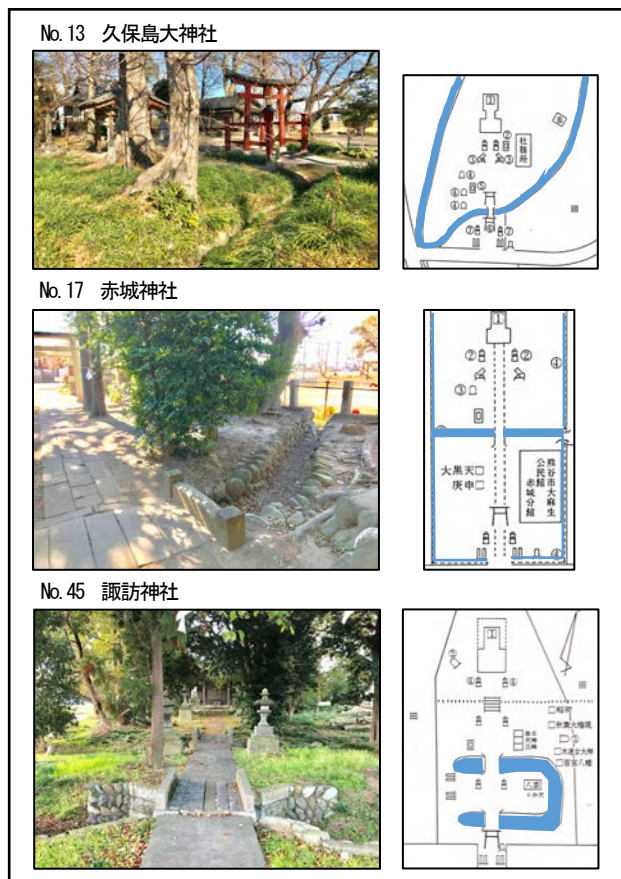


図-11 堀のある神社 (境内図は「埼玉の神社」<sup>10</sup>より引用)

## 5. おわりに

本研究の成果は以下の通りである。

- これまで多くの洪水被害に見舞われてきた荒川の扇状地と氾濫平野の熊谷市内33地区について、迅速測図や神社明細帳などを用い、合祀で消失したものも含む66の神社を特定した。

- 66の神社について、扇状地と氾濫平野ごとに立地地形、神社と河川や集落との位置関係についての分析をおこなった。その結果、扇状地では集落の端や微低地に独立しており、いずれも氾濫時に水が来る方向かつ集落の前方に神社が多くあることを明らかにした。氾濫平野では、決壊の記録が残る堤防の近くに多く立地していることを明らかにした。

- 以上の扇状地と氾濫平野における神社の立地特性の違いに対し、扇状地と氾濫平野の氾濫形態の特徴から考察をおこなった。まず、氾濫流路を伴いながら短時間に氾濫する扇状地では、微高地上の集落の被害を防止・軽減するために集落の端もしくは集落から独立した微低地の、氾濫時に水が来る方向かつ集落の前方に設けられ、氾濫水を分散・軽減する役割があった可能性を指摘した。一方、一度氾濫すると一面が浸水し、湛水時間も長時間となる氾濫平野では、神社を囲う鎮守の森に氾濫水の水量や水勢を抑制するといった水害防災林的機能があるという推測から、堤内の被害を最小限に抑えるために堤防沿いに設けられた可能性を指摘した。

- 神社の祭神の調査から、洪水の被害を抑えたい場所や洪水の危険性が高い場所の神社には、川や水に関わる神が祀られていることが多く、祭神にはその神社の立地する場所がどういった場所であるかが反映されていることを明らかにした。さらに、社殿の基礎の高さの計測を行い、微高地より微低地の神社の方がその高さが高くなること、ハザードマップによる浸水時想定水深が深くなるほどその高さも高くなることを明らかにした。これらの結果から、神社は、かつての人々がその土地の洪水のリスクを把握した上で、意味や役割をもたせて祀ったものであると指摘した。

自然は、人々の暮らしに恵みを与えてくれる神としての存在とともに、時に災難をもたらす荒ぶる神でもあるという両面性を持ち合わせていた。それを人々は受け入れ、折り合いをつけていかなくてはならなかった。それをふまえ、本研究で明らかになった神社の設けられ方をみると、ある程度の被害は受け容れ、壊滅的な被害は避けようという「氾濫受容型治水」といえるものであった。そこには、自然を受け容れ共存しようとする人々の姿勢が見て取れる。

しかし、時が経つにつれて、かつての人々のこうした

意識や元々備わっていた能力のようなものは薄れてきた。実際、自分が生活する土地の由来や歴史を知らない人は多いだろうし、それを知らうとする人も少ない。そんな中で、急激な都市化に伴い、地形も歴史も無視した宅地開発などが行われてきた。確かに現代の私たちは、さまざまな高度な技術を手に入れた。しかし、いくら堤防やダムなどを造ったとしても洪水被害を完全に無くすことは不可能であるように、自然災害の脅威に打ち勝てないことを私たちは身をもって実感している。

こうした時代においてこそ、身近にある神社に目を向け、その神社がそこにある意味を考えることは、その土地で生きていく上で基本的でありながら重要なことを知る機会となりうる。

特に、今回明らかになった神社の立地選定の考え方は、災害に強いまちづくりを行なっていく上で、大いに活かせる要素を含んでいた。今後は、神社という存在を自然の脅威を知り、それを後世に伝えるための地域コミュニティのランドマークとして捉え直すことも重要である。

また、本研究は神社に着目したものであったのだが、研究のなかで、寺と洪水の間にも関係性があることを感じさせることがあった。例えば、堤防で越流や決壊する時に溢れ出た水が地面を大きく洗掘した場所が落堀(おっぼり)という池になることがあり(落堀(押堀)洪水が残した爪痕 [http://www.gsi.go.jp/CHIRIKYOIKU/kawa\\_2-2.html](http://www.gsi.go.jp/CHIRIKYOIKU/kawa_2-2.html))、それが対象地にはいくつかみられたのだが、それらのすぐ近くに寺があったのだ。そして、その寺の創建年を調べたところ、落堀ができた年よりも後であった。つまり、決壊被害が起きたところにあえて寺が置かれたと可能性が高いのである。このようなことから、今後は神社だけでなく寺と洪水との関係の研究にも取り組んでいき、かつての人々の水害との向き合い方をさらに明らかにしていければと思う。

## 参考文献

- 1) 戸矢学：諏訪の神 封印された縄文の血祭り，河出書房新社，2014
- 2) 宮脇昭：森の力 植物生態学者の理論と実践，講談社現代新書，2013
- 3) 高世仁，吉田和史，熊谷航：神社は警告する，講談社，2012
- 4) 宮坂知成，中井祐，尾崎信：微地形と水害に着目した仙南平野の神社立地特性，景観・デザイン研究講演集，No.8，pp.235-240，2012
- 5) 高田知紀，梅津喜美子，桑子敏雄：東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究，土木学会論文集F6，Vol.68，No.2，pp.1167-1174，2012
- 6) 是澤紀子，堀越哲美：景観としての神社の立地に見る信仰の場と自然環境の関わり-京都府花折断層周辺の神社を事

- 例として，都市計画論文集，No.39-3，pp.145-150，2004
- 7) 服部周平，二井昭佳：扇状地散村集落における本家・神社の立地特性～富山県入善町小摺戸地区を対象として～，土木学会論文集D1(景観・デザイン)，Vol.68，No.1，pp.35-44，2012
- 8) 服部周平，二井昭佳：洪水常襲地における神社立地に関する基礎的研究～黒部川扇状地・富山県入善町を対象として～，景観・デザイン研究講演集，No.8，pp.241-248，2012
- 9) 熊谷市：荒川洪水ハザードマップ，熊谷市，2016
- 10) 参謀本部陸軍部測量局：第一軍管地方二万分一迅速測図原図覆刻版(フランス式彩色地図)，埼玉県武蔵國北埼玉郡上之村，大里郡久下村・熊谷驛・村岡村，幡羅郡三ヶ尻村，男衾郡小江川村，1883・1884
- 11) 埼玉県地方課：大里郡神社明細帳，明治～昭和23年
- 12) 熊谷市教育委員会：熊谷市史 資料編1 考古，熊谷市，2013
- 13) 斎藤滋，福岡捷二：荒川扇状地における集落の展開と自然堤防の役割に関する研究，土木学会論文集B1，Vol.67，No.4，pp.1673-1678，2011
- 14) 埼玉県神社庁神社調査団：埼玉の神社 大里・北葛飾・比企，埼玉県神社庁，1992
- 15) 栗田竹雄：荒川中流域の洪水について，秩父自然化学博物館研究，第9号，p.22，1959
- 16) 前掲文献15) pp.18-19
- 17) 前掲文献15) p.17
- 18) 大熊孝：水害防備林の再興に関する一考察，土木史研究，第17号，pp.135-143，1997
- 19) 東條英利：神社ツーリズム～世界に誇る日本人のルーツを探る～，扶桑社新書，pp.53-54，2013
- 20) 前掲文献19) pp.79-80
- 21) 昌平坂学問所：新編武蔵風土記稿 大里郡，1830(1884年に内務省地理局によって洋装活字版に編纂)
- 22) 茂木貞純：日本の神様 ご利益辞典，大和書房，2018